

劉裕の北伐西征とその從軍紀行

森 鹿 三

一

茲に劉裕の北伐西征とは、劉裕即ち後の宋高祖武皇帝が東晉安帝義熙五年（409, A.D.）に南燕の慕容超を伐ち同十三年（417, A.D.）に後秦の姚泓を征したことをいふのである。西晉武帝太康元年（280, A.D.）吳主皓降り漢末以來始めて天下が一統せられたのであるが、僅か卅七年にして西晉の王室は亡び、中原の地は蠻族の跳梁に任せたのである。かくて北方の名族は亂を江南に避け、晉室の一族司馬叔が大統を紹いで東晉の世となる。爾來北支那には所謂五胡十六國が興廢し漢族は江南に蹣跚するのである。その間先には桓溫の北伐あり、後には茲に取扱ふ劉裕の北伐西征がある。共に結果は不首尾に終つたが一時にもせよ洛陽・長安の地を奪回占據したことは江南の漢人の血を湧立たせるに十

分であつた。その一つのあらはれが數多き從軍紀行となつて残つてゐる。しかしすべて劉裕の北伐西征に伴つた紀行であるから上の如き題目を掲げたのである。

『隋書經籍志』史部地理類に見ゆる述征記二卷（郭緣生撰）、西征記二卷（戴延之撰）、西征記一卷（戴祚撰）、宋武北征記一卷（戴氏撰）の如き諸書は現在佚して傳はらぬが、他書に引用せる佚文より推して劉裕の北伐西征に伴つた紀行であることを知り得る。章宗源の『隋經籍志考證』にはその他に郭緣生の續述征記（水經渠水注・宜泮水注・初學記地部引）、裴松之の述征記、同人の西征記（魏志三少帝紀注・太平寰宇記河南道引）、盧思道の西征記（太平寰宇記河北道引）、邱淵之の征齊道里記（太平御覽序部・地部・北堂書鈔歲時部・史記高祖本紀正義引）、裴松之の北征記（後漢書獻帝紀注引）、徐齊民の北征記（續漢書郡國志注引）、孟輿の北征記（初

學記天部・太平御覽天部・居處部引）、伏滔の北征記（續漢書郡國志注・水經濟水注・文選謝靈運初發石首城詩及擬劉楨詩注引）、伍緝之の從征記（漢書東平憲王傳注・初學記文部・水經注引）、東征記（文選西征賦注引）の如き一群の紀行を著録してゐる。是等を通觀するに郭緣生には述征記の他に續述征記の著あり、戴延之には西征記の他に宋武北征記の作あり、裴松之は述征記・西征記・北征記の三書を撰してゐる。或は北伐と西征を分つて同一人にかゝる著作があるのかとも思ふが、輯めた佚文からはそのやうな斷言はできない。或は同一書の異名とも考へられるが之亦推測に止まる。

この問題は後に再言する。邱淵之の征齊道里記はその書名より、伍緝之の從征記はその輯めた佚文より俱に南燕征伐に伴ふ紀行であらうと思はれる。その他は郭氏の書が北伐西征に跨つて記す外は殆ど後秦討伐に伴ふ紀行と思ふ。洛陽・長安の奪回を含む西征紀行の豊富なのは江南に追込められた漢族の興奮を物語つてゐる。かくの如く劉裕の北伐西征に伴ふ紀行が十數種も作製されたことは江南漢族の感激によるものであらうが、劉裕がこの武功によつて宋王となり遂に晉帝の禪

を受けて宋朝の太祖となつた爲めにその功業を記念する意圖が多分にあつたと思はれる。是、桓溫の北伐記が缺如し、獨り劉裕の從軍記の存する所以である。しかし是等の書は次第に佚し去り、現在では他書に引用せる佚文によつて纔かにその倖をしのぶ状態である。その内でも郭・戴二氏の書以外の佚文は極めて少いから、今は主として郭・戴二氏の書によつて劉裕の北伐西征を考へることにする。又上述の如く北伐よりも西征の記載が豊富であるから本稿も自ら後秦討伐の經過に重點を置くであらう。

二

義熙四年の末南燕主慕容徳が死し兄の子超が位を襲ふや屢々晉の邊境に寇し、翌五年二月には淮北に侵入し來り陽平太守劉千戴及び濟南太守趙元驅を執へ千餘家を略した。そこで翌三月に劉裕は北伐を表明し、四月己巳建康今の南京を發し舟師を率ゐて淮水より泗水に入り、五月下邳今の宿遷縣の東北で船を下り、歩軍で瑯邪に進んだ。過ぐる所皆城を築いて留守せしめた。莒城今の山東莒縣の梁父今の萊蕪縣の西南の二戍並びに奔走す。遂に大峴臨朐縣の東南を

過ぎた。勝に乗じ逃ぐるを逐うて廣固城今の山東益都縣に至る。六月丙子その大城に克つたので慕容超は衆を收めて退いて小城を保つた。そこで劉裕は長圍を築いて持久戦になつた。翌六年二月丁亥に至つて方めて廣固城を屠るを得た。超を京師に送り建康の市に斬つた。以上が南燕討伐の大要である。

南燕討伐に伴ふ紀行としては邱淵之の征齊道里記、伍緝之の從征記があるが、是等の書には曲阜の孔子廟、泰山の三廟、吳季札兒冢、廣固城近傍の舊跡、齊桓公冢などが記されてゐる。郭緣生の述征記には歷城今の濟南廣固城、桓公冢について記し、同じく續述征記には臨朐の東北にある逢山や鄒平の東を流れる隴水今の孝婦河を記してゐる。かくの如く述征記、續述征記ともに南燕討伐に伴ふと思はれる記事を載せてゐるから、この兩書を以て北伐西征を別載したものといふことはできぬ。ともかく北伐に伴ふ記事は西征に比して少いから他日山東の古地志を述べる時に併せ論ずることゝし茲では詳しく述べない。

三

義熙十三年正月劉裕は水軍を率ゐて彭城今の江蘇銅山縣を發し、三月には淮・泗より清河に入り、その月庚辰には黃河に入り左將軍向彌を北青州刺史とし碭碭今の山東茌平縣に留めてゐる。四月には洛陽に至り七月には陝・八月には閩郷、その辛丑には潼關に至り、九月には長安に達してゐる。かくて建康より洛陽に都を遷さうとしたのであるが、十一月辛未會々大臣劉穆之の卒したため急遽建康に赴いたのである。還路は宋書に「自洛入河、開汴渠以歸」とあれば往路とは異り、汴渠（大體咸豐五年北徙以前の舊黃河に當る）を開いて彭城に至り、以下は往路と同じく泗水・淮水によつて揚子江に達し建康に歸つたのである。

この往還路は郭緣生・戴延之等の紀行によつて詳細に知り得たのであらうが、今は纔かに他書に引用せる佚文によつて想見するのみである。しかしその佚文は相當に輯めうるからそれを綴合はすと幾分その舊觀に復することができ。清の王謨が郭緣生の述征記、戴延之の西征記の輯本を作製して『漢唐地理書鈔』中に收めてゐる筈であるが、我々の見得る唯一の『漢唐地理書鈔』わが東方文化學院京都研究所々藏本には兩書

俱に缺けてゐるから、新しく輯本を作製せねばならぬ。しかし輯本の作製は後日に譲り今はたゞ輯めた佚文中より興味ある記事を抽出するに止めよう。

郭緣生に正續述征記の著があるがその關係が明らかでないことは上述の如くである。又郭緣生なる人に就いても知る所がない。それに比すると戴氏の方は種々のことが判る。『隋書經籍志』に戴延之の西征記二卷と戴祚の西征記一卷とが并載されてゐるが、兩者が同一の書であり、祚は名で延之は字であらうといはれる（章宗源の説）。御覽九二三には戴祚西征記を引いて

祚至雍邱。始見鵠。大小如鳩。色似鸚鵡。戲時兩々相對。

といふ。唐の封演の『封氏聞見記』七には同じ文を引いて開封縣東二佛寺で見たといふ。雍邱は今の河南杞縣今の通許縣の北の東に當るから大體の場所は同じであらう。『封氏聞見記』にはその文に續いて

〔戴〕祚江東人。晉末從劉裕西征姚泓。至開封縣始識鵠。則江東舊亦無鵠。

とあり、戴祚が江東今の江蘇省揚子江以南の地の人であつたことを知る。『水經注』一五には

義熙中。劉公西入長安。舟師所屆。次于洛陽。命參軍戴延之與府舍人虞道元。即舟遡流。窮覽洛川。欲知水軍可至之處。

とあるによつて戴祚（延之）が劉裕の參軍であつたことが判るが、『隋書經籍志』史部雜傳類に「甄異傳三卷晉西戎主簿戴祚撰」とあるから、その後西戎主簿に遷つたらしい。西戎主簿は西戎校尉の屬官である。劉裕が後秦を討伐した後、劉穆之の死に會ひ急遽建康に赴いたことは上に述べたが、劉裕は長安を發するに際して次子桂陽公義真を安西將軍領護西戎校尉雍州刺史とし腹心の將佐を留めて之を輔佐せしめた。（宋書武三王傳）戴祚はその西戎校尉府の主簿として長安に留つたものと思はれる。その著には西征記・甄異傳の他に宋武北征記一卷・洛陽記一卷がある。宋武北征記は『隋書經籍志』に著録せられたゞ戴氏撰といふのみで名字は明記してゐないが、錢大昕の『隋書攷異』には戴祚の著はしたものとしてゐる。もし戴祚の著書とせば西征記と如何なる關係にあるか。北征記もその佚文よりみると西征記と同じく後秦討伐に經過した土地のことを記してゐる（少室山、敖倉の如し）から、姚振宗の如

く單に書名より推定して北征記を南燕討伐に伴ふ紀行とする『隋書經籍志考證』(その條)のも不可である。もし兩者を異名同實とせば同じ後漢書の注に楊賜傳には延之西征記といひ呂布傳に宋武北征記といふのも不審である。後考を待つ。洛陽記の方は『舊唐書經籍志』『新唐書藝文志』に見える。

四

次に郭・戴兩氏の記述によつて劉裕の西征に經過した地方の形勢を見よう。下邳・彭城を経て泗水(河水)を過り、黃水・洪水を過ぎて濟水に入り碯礪に於て河に入るまでを第一段。碯礪より河水を過り洛水に入り洛陽に至るまでを第二段。その後陳・閿鄉・潼關を経て長安に至るまでを第三段とする。

第一段中で興味のあるのは西征記水經注八・御覽四二所引に見える魯峻冢の記事である。今の山東金鄉縣の北、鉅野縣の東南に當る。左にその文を引く。

焦氏山北數里有漢司隸校尉魯峻冢。穿山得白蛇白兔。不葬。更葬山南。鑿而得金。故曰金鄉山。山形峻峭。冢前有石祠石廟。四壁皆青石。隱起自書契以來

忠臣孝子貞婦孔子及弟子七十二人形象。象邊皆刻石記之。文字分明。又有石牀。長八尺。磨瑩鮮明。叩之聲聞遠近。時太尉從事中郎傅珍之。諮議參軍周安穆。柝敗石牀。各取去。爲魯氏之後所訟。二人並免官。武氏石闕や孝堂山石室などの存する山東西部地方に同じく畫象石をもつ石室のあつたことは興味あることで、この記載は非常に貴いものである。

この金鄉山の北を流れる黃水を一に桓公溝といひ、更にその北にある薛訓渚より出づる水が二分して一は東して黃水に注し、一は西北流して洪水となり鉅野澤の北端に於て濟水と合するが、この洪水を桓公瀆ともいふ。茲に桓公とは桓溫を斥すのであつて、桓溫が東晉廢帝太和四年(383 A.D.)衆を率ゐて北伐した時に穿掘した溝渠である。劉裕の西征するに際してもこの溝渠を利用しその功を廣め洪口即ち洪水と濟瀆の合流點以北にも及ぼしたのである。(水經注八に據る)劉裕はこの水路によつて河水の碯礪津に達したのである。洪口の北に於て濟水と汶水が合する處を西征記は清口と稱し、述征記が「清河首受洪水。北注濟云々」といつてゐる俱に水經注八所引のは劉裕の西征にこの水路を用

ひた一つの證左とすることが出来る。この水路は鉅野澤の東に沿ひ泗水と河水を結ぶもので大體今の南運河の西に並行する線である。鉅野澤は一に巨澤ともいひ西征記御覽七二所引には「巨澤魯之西界。孔子獲麟處。」と記してゐる。

濟水の河水に注する處を四瀆口といふ。その東に垣苗城ありもと洛當城と云つたが、劉裕が西征する時、垣苗なる人を此處に鎖せしめたので俗に垣苗城の稱があるといふ。水經注八 四瀆口の東南の碣磳に就いて述征

記水經注五所引は「碣磳津名也。自黃河泛舟而渡者皆爲津也」といふ。この地は軍事交通上の要地でその後宋魏對峙の時代にも爭奪が行はれてゐる。劉裕の西征に際しても此處に左將軍向彌を留めたことは上に述べた。

五

碣磳より河水を遡るのであるがその間經過する處は倉亭津・長壽津・遼明臺・白馬城・滑臺城等である。述征記前三項は水經注五、四項は御覽一九三、五項は同四〇所引に

倉亭津在范縣界。去東阿六十里。

涼城到長壽津六十里。

遼明臺袁紹時築。

白馬城魏黃初中曹彪封白馬王。治于此城。

登滑臺城。西北望太行山。白鹿巖。王莽嶺冠于衆山之表。

と記してゐる。西征記にも夫々記述する所あるも省略する。進んで濟水の河水より出づる滎澤の方面今の河南原武縣に至る。この地に宿須水あり水は河水を受け東南流して濟水に注する。桓溫の北伐の時この溝渠を通じようとし、果さずして還つたが、劉裕の西征するや故渠を鑿つて之を通じた。水經注七 丁度此處の河水の北七十里に七賢のゐた竹林がある。述征記御覽一八〇及九六二所引に

山陽縣城東北二十里有魏中散大夫嵇康園宅。今悉爲田墟。而父老猶種竹木。謂嵇公竹林地。以時有遺竹也。

といふ。『水經注』九所引の述征記には「白鹿山東南二十五里有嵇公故居。以居時有遺竹焉。」と記してゐるが同じ場所を斥してゐる。七賢の一人なる向秀の所謂「山陽舊居」である。

更に河水を遡り黃馬坂（寰宇記五所引西征記）を経て

洛口に至る。洛水と河水の合流點である。洛水を廻ると百一に栢谷場に達する。西征記水經注一に「場在川南。囚原爲塲。高十餘丈。宋武王西入長安。舟師所保也。」とあり、劉裕西征の時に停泊した處である。百谷場の東南に中嶽嵩高がある。西征記文選李善注二二所引、記を賦に作るに「嵩中岳也。東謂太室。西謂少室。相去十七里。嵩高總名也。」

漢武帝作登仙臺。在少室峯下。」とあり、同書御覽三九所引には、少室山中に神藥の多いことを述べてゐる。又同書御覽八〇六所引には

宋公諮議王智先停栢谷。遣騎送道人惠義疏曰。有金壁之瑞。公遣迎取。軍次于嶠東。金壁至。修壇拜受之。なる事件を載せてゐるが、この金壁に就いては同書御覽八〇六所引に

冀州博陵郡王次寺道人法稱告弟子普嚴曰。嵩高皇帝語吾言。江東有劉將軍。是漢家苗裔。當受天命。吾以四十二壁金一餅與之。壁數是劉氏ト世之數也。惠義以義熙十三年入嵩高山。即得壁金獻焉。

とあつてその顛末が明らかである。『宋書符瑞志』や『建康實錄』一一及一四にも記されてゐるが四十二壁を三十二壁に作つてゐる。孰れにしても劉氏ト世之數に

ならぬので種々の説が出来る。ともかく劉裕の帝位に即くことはこの時豫約されてゐるのである。

尋で伊水に入り袁術固の北を過ぐ。宋武北征記元和郡縣志六に「少室山西有袁術固。可容十萬衆。一夫守隘。萬人莫當。」といふ。又西征記御覽六二所引には

伊水上源經新城陸渾二縣。男女無少長。皆病癭。俗云水土所致。伊水不可飲也。

といふ奇怪な話を載せてゐる。癭とは頸瘤のことである。『博物志』一五には「山居多癭。飲水之不流者也。」とある。一種の風土病であらう。次に洛水の方も航行し得る限り廻つて檀山塲洛寧縣の西今の河南に至つたことは上述したが、その時の光景を西征記御覽七七〇所引には

檀山塲去洛城水道五百三十里。由新安・澠池・宜陽三縣。男女老少。未嘗見船。既聞晉使溯流。皆相引蟻聚川側。俯仰傾笑。

と言つてゐる。同書御覽六〇五所引には新安縣の石墨山のこととを、又同書御覽四二所引には檀山塲に至るまでに宜陽縣に金門塲なる地のあることを記してゐる。

次に洛陽は江南に踞踏せる漢族にとつて思慕の土地であるだけに記載が詳密豊富である。戴祚が洛陽にゐ

たのは義熙十三年六月であるらしく、西征記御覽六八所引に左の記事がある。

凌雲臺有水井。延之以六月持去。經日猶堅也。

この水井に就いては述征記御覽六八所引にも「水井在凌雲臺北。古舊藏氷處。」と言ふ。同書御覽一七八所引に

凌雲臺在明光殿西。高八丈。累碑作道。通至臺上。登

廻眺究觀洛邑。暨南望少室。亦山邱之秀極也。

といふ。その南の太極殿については西征記にその銅龍及び銅鍾を記してゐる。

太極殿中有銅龍。長三丈。銅樽容三十斛。正旦大會。

龍從土中受酒。口吐之於樽中。御覽七六一所引

洛陽太極殿前左右各三銅鍾相對。鍾大者三十二圍。

小者二十五圍。御覽五七五所引

鐘大者三十二。博山頭形。環紐作獅子頭。鍾大者三

十二。博山頭二丈。厚八尺。大面廣一丈二尺。小面七

尺。或作蛟龍。或作鳥獸。周繞其外。同前

最後の記事には脱誤があるやうであるが暫くそのまゝにして置く。次に述征記・西征記に見ゆる洛陽の記事を東南西北の順に列舉しよう。

太子宮東有翟泉。今乾無水。寰宇記三所引西征記

洛陽建春門外道北有白社。董威輦所住也。去門二里有牛馬市。嵇公臨刑處也。御覽五三二所引西征記

東陽門外道北。吳蜀二主第宅。去城二里。墟基猶存。御覽一八〇所引西征記

東城二石橋。舊於王城東北開渠引洛水。名曰陽渠。

東流經洛陽於城之東城。然後北廻通運。至建春門以

輪常備倉。御覽一九〇所引述征記

國子堂前有刻碑。南北行三十五枚。刻之表裏。書春

秋經・尚書二部。大篆・隸・科斗三種字。碑長八尺。

今有八十枚存。餘皆崩。太學堂前石碑四十枚。亦表

裏書尚書・周易・公羊傳・禮記四部。本石墮相連。多

崩敗。又太學讀碑一所。漢建武中立。時草創未備。永

建六年。詔下三府繕治。有魏文典論六碑。今四存二

敗。御覽五八九所引西征記

太學在國子學東二百步。學堂裏有太學贊碑。記曰。

建武三十七年立太學堂。永建六年制下府繕治。并立

諸生房舍千餘間。陽嘉元年畢。刊于碑。有太尉廳參・

司徒劉琦・太常孔扶・將作大匠胡廣答記制。御覽五三四所引述

征記

國學在辟雍東北五里。文選注一六所引述征記

洛城南有平昌門。道東辟雍壇。去靈臺三里。俱是魏武帝所立。高七丈。御覽五三四所引西征記

諺門宣陽門也。袁字記三所引述征記

廣陽門北魏明帝流杯池。猶有處所。池西平原。懿公主第有皇女臺。御覽一七七所引述征記

廣陽門西南有劉曜壘。試弩棚。西北有闕雞臺。射雉觀。袁字記三所引述征記

御溝引金谷水從閭闔門入。文選注二二所引西征記

北芒去大夏門不盈一里。文選注二六所引述征記

北芒洛陽北芒嶺。靡迤長阜。自滎陽山。連嶺脩亘。暨于東垣。文選注二〇所引述征記

北芒有張母墓。舊說張母是王氏妻。王家葬。經有年載。後開墓而香火猶燃。其家奉之。稱清火道。御覽八六八所引述征記

永嘉中張母有神術。能愈病。故元帝渡江時。延聖火于丹陽。袁字記三所引西征記

北邙東則乾脯山。山西南晉文帝崇陽陵。陵西武帝峻陽陵。邙之東北宣帝高原陵。景帝峻平陵。邙之南則惠帝陵。文選注三八所引述征記

この他に「洛陽城有鬱金屋」御覽一八一といふも何

處にあつたか知り得ぬ。以上の記事は郭・戴兩氏が親しく目睹耳聞したものであるだけに精彩に富んでゐる。西征記に魏三字石經の數と三十五枚としてゐるが楊街之の『洛陽伽藍記』には二十五碑、『水經注』には四十八碑といふ。王國維はこの三者を比較して「魏石經石數當以西征記爲最確也」と結論してゐる。觀堂集林二〇

魏石經考

洛陽の西に石崇の故居がある。西征記御覽五四所引梓澤去洛城二十里。澤在金谷之中。朝賢所集賦詩。是石崇所居。

といふ。その西に千金塢あり、同書袁字記三所引金・漑・穀三水合處有千金堰。即魏陳思王所立。引水東灌。民今賴之。

と云ふ。

六

洛口より陝城に至る間に孟津を過ぐ。述征記水經注一所引盟津河津恆濁。方江爲狹。比淮濟爲闊。寒則水厚數丈。水始合。車馬不敢過。要須狐行云。此物善聽。氷

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

に

下無水乃過。人見狐行方渡。

といふ。新函谷關の西にある白超壘について西征記水經注一 六所引には

次至白超壘。去函谷十五里。築壘當大道。左右有山夾立。相去百餘步。從中出北。乃故關城。非所謂白超壘也。是壘在缺門之東十五里。壘側舊有塢。故治官所在。魏晉之日。引穀水爲水冶。以經國用。遺跡尙存。

といつてゐる。更に進んで陝城今の河南陝縣に至る。この城に就いて西征記には、

陝縣周召分職處。城南倚山原。北臨黃河。懸水百餘仞。臨之者悚慄。寰宇記六所引

陝縣城西北二面帶河。河中對城西北角。水湧起勃鬱。方數十丈。有如物居水中。父老云銅鍾翁仲。頭髮常出水上。漲減恒與水齊。晉軍當至。髮不復出。唯見水異。嗟嗟有聲。聲聞數里。翁仲本在司馬門外。爲賊所徙。當西入關。至此而沒。御覽三七三・五七五所引

といふ。この翁仲は『魏略』に

〔明帝〕大發銅鑄作銅人二。號曰翁仲。列坐於司馬門外。

といふもので、賊とは苻堅をさすのであらう。戴氏が親しく父老に聞いた所ではあらうが史實か否か判定できない。或は河水の漲減を測定する銅人にかゝる傳説が附會されたのかも知れない。

次に故函谷關・柏谷亭・漢武思子宮を経て八月辛丑には潼關に達する。郭・戴二氏の書より記事を拾へば次に列するが如くである。

舊函谷關道形如函也。其水山原壁立數十仞。谷中容一車。史記高祖本紀正義所引西征記

柏谷谷名也。漢武帝微行所至處。長傲賓於柏谷者也。谷中無迴車地。夾以高原。林柏蔭謁。窮日終弗覩陽景也。御覽九五四所引述征記

漢武帝延和二年衛太子遇江充之亂。奔湖自縊。壺關三老太廟令田千秋訴太子之寃。築思子宮於湖。其城存焉。御覽一九三所引述征記

漢末之亂魏武征韓。遂馬超連兵。此地今際河之西。有曹公壘。道東原上云李典營。義熙十三年王師曾據此壘。水經注四所引述征記

沿路逶迤。入函道六里。有舊城。城周百餘步。北臨大河。南對高山。姚氏置關以守峽。宋武帝入長安。檀道

濟・主鎮惡或據山爲營。或平地結壘。爲大小七營。濱帶河險。姚氏亦保據山原陵阜之山。尙傳故跡矣。經水

注四所引
西征記

黃卷坂者傍絕澗以昇潼關。長坂十餘里。九坂皆迴遷

長坂。東京賦所謂西阻九阿者也。御覽五三所
引述征記

河自潼關北東流。水側有坂。謂之黃巷坂。文選注一〇
所引述征記

又河水以北の吳坂や蒲坂についても記してゐるが省略する。河水より渭水に入り長安に至る。長安について記す所は次の如くである。

苻秦築宮于長安東城。中有太極殿。殿上有金井焉。

寰宇記二五
所引西征記

太極殿上有金井闌・金博山・金鹿臺・盧蛟龍負山。於

井上又有金獅子。御覽一七五
所引西征記

極西南端門外有石。石色青而細。修之作博碁。以遺

江東。甚可珍玩。御覽七五四
所引述征記

去端門百餘步。道南得尙方。北門中有指南車。車上

有木仙人。持信幡。車東西。人恒指南。御覽七七五
所引述征記

青門外有魏車騎將軍郭淮碑。小城最東一門名落索

門。門裏有司馬京兆碑。郡民所立。御覽一八三
所引述征記

長安宮南有靈臺。臺高十仞。上有銅渾天儀。又有相

風銅鳥。或云此鳥遇千里風乃動。御覽五三四
所引述征記

徽音殿西南。姚興起波若臺。有逍遙園。西去三百步。

有鹿子苑。羌王養樂鹿數百頭。御覽九〇六
所引西征記

逍遙宮門裏有銅浴盤一面。徑丈二尺。魏景初中所

鑄。御覽七一二・七
五八所引述征記

第四項の指南車は『宋書禮志』に

魏明帝青龍中令博士馬鈞造之。而車成。晉亂後亡。

石虎使解飛。姚興使令狐生又造焉。安帝義熙十三年

宋武帝平長安。始得此車。

とあるもので姚泓の父興の時に作られ、劉裕の西征によつて之が江南に齎らされたのである。第六項の渾天儀も他の彝器・土圭と共に京師建康に送られたことは『宋書武帝紀』に見える。

七

劉裕の長安より建康への還路は汴渠を開いて歸つたのであるが、郭・戴二氏の書の佚文中この道筋に關係ある記事は次の如くである。

官渡臺去青口澤六十里。魏武造也。破袁紹於此。御覽

一七七所
引西征記

西北有大梁亭。水經注二二
所引西征記

陽樂城在汴北一里。周五里。雍丘縣界。水經注二三
所引西征記

莠倉城去大游墓二十里。水經注二三
引續述征記

堂城去黃蒿二十里。同
前

黃蒿到斜城五里。同
前

〔周塢〕斜城東三里。晉義熙中劉公遣周超之自彭城緣汴故溝斬樹穿道。七百餘里。以開水路。停泊于此。故此塢流稱矣。同
前

夏侯塢至周塢各相距五里。同
前

〔襄鄉塢〕西去夏侯塢二十里。東一里即襄鄉浮圖也。

汴水逕其南。漢熹平中某君所立。死因葬之。其弟刻

石樹碑。以旌厥德。隧前有獅子天鹿。累塼作百達柱

八所。荒蕪頽毀。彫落略盡矣。同
前

小蒙城在汴水南十五里。水經注二三
所引西征記

以上の佚文は汴水の流域であつて恐らく劉裕の還路の記事と認められるものである。

上に掲げた郭・戴二氏の書の佚文によつて劉裕の西征の路程は相當詳細に知り得るが更に輯佚を完全にするならば愈々精密に西征の路程のみならず、晉宋の地理が明らかにされるであらう。

〔附記〕郭緣生の述征記の中には

林檎果實可佳。其楨梓實微大。其狀醜。其味香。

輔關有之、江淮南少。御覽九七
一所引

洛水至歲末凝厲。則款冬生層氷之中。御覽九九
二所引

踐中牟縣境。便觀麻黃草。窮則知踰界。水經注二
二所引

洛水底有礪石。故上無氷。御覽六
二所引

の如き記述があつて、郭氏の博物に少からざる興味を有つてゐたことが判る。郭緣生なる人はその本末を詳らかにするを得ないが、郭氏の一族には郭璞の如く山海經や爾雅の注を書いた人や、郭義恭の如く張華の博物志を廣うしたと考へられる廣志を撰した人がゐて、博物の學に詳しいから、或はそれらに親縁のある人であらう。ともかく地理の記述をするに當つて自然環境を忽緒に附せぬ態度は注意に値する。又碑碣に對しても博載してゐるらしいことは佚文のみからでも想見できる。郭氏が勝れた地理家であつたことは本文中よりも看取できるが更に一二の點を附加して置く。その著書から晉宋の間の人なるを知るのみでその經歷を詳らかにしえないのは遺憾である。